

## 中国近代を詠んだ詩人

— 児玉花外と孫文・陳其美・黄興 —

中 村 義

はじめに — ”霧に隠れてしまつて、自分の姿をみせない詩人“

『社会主義詩集』<sup>(1)</sup>（明治三六年）で日本で最初の発売禁止を受けた児玉花外は、「重き愁の身をのせて」で始まる「馬上哀吟」は同時代の青年に愛唱された「明治代表詩人」であつた。大正時代に入ると、英雄、志士、義人、浪人、時事等について数々の詩文を残している。それらの中に、中国革命の群像、日中関係の史的事実を題材にした作詩が、比較的に多いのに私は惹かれた。ところが、詩人としての評価はもっぱら明治時代に止まり、大正以後は日夏耿之介が「詩壇から全く放れてしまった」<sup>(2)</sup>と書き、さらに生活ぶりから「花外が晩年養老院に窮死したのは如何にも彼らしい残生といふべく、共に社会主義を口にした誰彼が、口頭禪と離れて、生活は贅沢俗悪だったのに較べていかにも浪漫時代の人道詩人らしい怠放蕭散の東洋文人的倂が看取せられ、心ある人にはゆかしがられた。花外こそは、必ず浪漫時代にその名を人道的空想社会主義者として数へねばならぬ一人であつた」<sup>(3)</sup>と評された。詩人花外の生涯は「浪漫時代の人道空想的社会主義者詩人」がレッテルか、さもなければ墓碑銘というべきか。

同年生まれで、交遊の深い詩友河井醉茗は、その著で『明治代表詩人』<sup>(4)</sup>として花外を称賛してはいるが、大正以後の花外

を「純なる詩人肌の男」と呼んで、次のように書いている。

大正以後は定型を脱却して自由奔放な詩を作るやうになったが、明治年代に於てはわれわれと同じく主として七五の定型に準じたけれども彼の詩は直感そのままを表現しやうと試みて技術の方は余り顧みなかった。それと同時に花外は実人生に目を向けた。詩人歌人といへば未だ鶯燕舞の夢の抜け切れない時代から、彼は実社会の上にその持つて生まれた感受性を反映せしめた。それについてもその特色は大正以後にも喪はれなかったけれど、更に視野を転じて英雄、志士、義人等に向け、愛国的な情熱を帯びることになった。花外の人物を知っていると、詩に多少の欠点はあっても、成程正直な彼の詩だといふことが肯かれる。人間が既に天成の詩人肌であつたから、彼を知る限りの人々は親しみを感ぜた。<sup>(5)</sup>

醉茗は、言葉を選び、花外の詩風から人柄まで、行きとどいた解釈をしている。名誉や地位や財産に活潑で、酒を唯一の友とした花外だが、昭和の戦争頃には、時流に乗って、一九四三年（昭和一八）には「児玉花外詩集」を出版している。同時代人醉茗にはそれがつらく、気がかりのまま、前述の花外論となつたのであろう。戦後、醉茗の妻島本久江はその著書<sup>(6)</sup>で「戦争のまつただなかで、詩もただ士気昂揚の、いわば元気づけのコップ酒的な効用を望まれている。そして大正昭和の花外の詩というものが、正にそのコップ酒的虚勢の空転に過ぎなくなつて居、しかも酒に憑かれてしまつて酒なしにはものもいえなくなつてゐる花外によるこんで酒を供する一群、それは一応みな単純でそして善良の憂国の士たち<sup>(7)</sup>だったので、こういう見方も仕方がない気がする」と、夫の见解を補うように書いている。島本の書は直接の交友、書簡、エピソードなど豊富な内容の好著である。

作家井伏鱒二も花外が気になるのだろう。聞き書の体裁ながら、次のように述べている。

詩といふものは、語呂の上から云つて甘味がなくちゃいかん。その觀念が圧倒的に行き渡つてゐた。世を挙げてそれが大流行だった。しかし、花外さんは技巧を全然無視してゐた。悲憤慷慨の詩もつくつた。垢抜けした語句など見向きも

せずに、感じたままを在りあはせの言葉で出そうとして、それを押し通してゐるうちに世間から忘れられた人ださうだ。無器用ということは詩の批評の場合は避けたいが、無器用といふ評語を持ち出すつもりなら、花外さんの生活の仕方に差向けたらいい、無器用を通り越して生活は破滅的であつた。<sup>(8)</sup>

もう一つ、投書家時代に花外に認められた室生犀星は「自分は天下に先生と呼ぶ人を持たず、誰の前でも嘯ける資格をもつた男だが、只、児玉さんだけは自分の比類なき先生であつた」と書いて<sup>(9)</sup>いる。

花外の詩については多くは、「技巧無視」とか「垢抜けない」とか、厳しい文言がならぶが、いずれも花外の人柄を彷彿させる暖かい話にくるまれて、酷評ではない。島本の「人柄の方が詩を乗り越して目に入る」の類いであつた。<sup>(10)</sup>

以上で文壇、詩壇から花外への関心と見解が奈辺にあるか、ほぼお解りいただけたと思う。ところが一つだけ追加しなければならぬことは、花外自身が晩年に、甥の白藤董氏に「私の詩は明治四〇年ですでに終り、それ以後の作品は『明治大学校歌』を除けば、すべて呟きでしかない」と大方の批評を肯定していたという。同様な点を手塚英孝も書いている。果たして本音の述懐なのだろうか。ちなみに明治大学校歌自体も作詩過程についても、西条八十の補作に負うところ多かつたとの新たな問題が提起されている。<sup>(12)</sup>

いずれにせよ児玉花外の大正以後の詩人としてのプラスの姿は浮かぶびあがつてこない。酔茗に言わせると、「霧にかくれてしまつて、自分の姿を見せない詩人、……白日に姿を消したが、君は分らない」のであると。

しかし幸いに、「白日に姿を消した君」を探すために、手引となるヒントを与えてくれたのは大岡信氏である。問題は正の叙事詩の行方であつた。大岡氏は述べた。

明治三〇年代には日本武尊や浦島太郎のような神話や伝説の人物、義経、日蓮、太閤秀吉のような史上の人物をとりあげて長編の詩を作るのだが、ふしぎなことに明治三六、七年のころにはほぼ出尽くして、火が消えたようになる。その時点で、詩人たちはおおむね叙事詩への野心を失い、近代詩史は叙情詩の圧倒的優勢の時代に入る。<sup>(13)</sup>

日夏や醉茗にない重要な指摘である。大岡氏の指摘に従うと、花外の大正時期の叙事詩は、すでに叙事詩が斜陽化して、叙情詩全盛時代を背景にしていた。同時代の詩人たちが野心を失った中に、誰もが選ばなかった路を、独り叙事詩に熱血を込めて、悲憤慷慨の詩を作り続けていたのであった。

石丸晶子氏は、叙事詩の行方について、唐木順三の「現代史への試み」、「近代日本の思想文化」を援用して、「叙情詩的色彩の濃いものがあるにせよ、叙事詩と名のつくジャンルの詩は歴史の表舞台からは完全に姿を消す時が到来したのであった<sup>(14)</sup>」という。川端康成は大正末の「長編叙事詩は甚だしく時代錯誤的な、同時に今日の詩の世界から醜く墜落した存在<sup>(15)</sup>」と、厳しく、完全否定している。叙事詩は斜陽化したか、あるいは墜落したのか、いずれにせよ、霧の世界に、花外の姿がすっぽりと隠れてしまった。

先行研究について述べると、中国近代史研究サイドから、野沢豊氏が孫文を詠んだ花外の作品を紹介した先駆的業績がある<sup>(16)</sup>。近年には、児童文学の視点から、上田信道氏が花外の大正期の作品をとりあげ、また後藤正人氏は画家百穂、芋銭との交流から花外の作品を鑑賞している。さらに明治期社会主義詩人として、野口存弥氏の研究が野口雨情や同時代人との交流、内容、修辭などの緻密な分析となり、花外認識は更に深められている。資料の上でも、桑原伸一氏の努力で、花外研究はゆたかになって来ている。

こうした諸成果を念頭におきながら、私は中国近代史研究のため文学作品を資料としてのみ組上に載せるのは二義的作業なりと自戒しつつ、鑑賞にあたっては、対象とする人物（また歴史的事実）が措辞、修辭、詩的文脈を通じて、叙事詩の中にその足跡と思想がいかに総括されているか否かを問うことであると考え。また七・五、五・七調の定型詩、自由詩をとわず吟唱、朗唱してリズムカルで、調子の高さに感銘を与えること。そして叙述上、史的事実、人名、耳慣れぬ地名、難解な概念等の使用は避けられないとしても、一語一語、一句一句に美しさ、情感を読者に抱かせること等を尊重すべきと考える。以上門外漢が興にまかせて、暴虎馮河の謗を怖れず、霧にかくれたか、墜落したか、花外の姿を求めて、中国近代

史研究からの接近を試みたい。

## 一、語部としての花外

児玉花外は明治時期に、「東京独立雑誌」(明治三十三年三月)に「支那パイプ売——われ西の京に在る日この異邦人をみたり」を載せて、「敗けたる国の人といへ」と差別に苦しむ「支那人—異邦人」という詩を書いていた。大正時代に入ると、憑かれたように中国革命に関して、次から次と発表する。

孫逸仙に与ふる詩	太陽	一九卷三号	大正二年三月
支那南方に寄するの詩	太陽	一九卷一〇号	大正二年七月
亡命客と日本	太陽	一九卷一二号	大正二年九月
孫逸仙今奈何	雄弁	六卷九号	大正四年九月
時事雑詩(揚子江を思ふ)	太陽	二二卷一二号	大正四年一〇月
章炳麟君を弔ふ	太陽	二二卷一三号	大正四年十一月
地の一角を踏へて	太陽	二二卷一号	大正五年一月
塞国女軍を弔ふ	太陽	同右	同右
揚子江のほとり	太陽	二二卷二号	大正五年二月
支那婦人に	読売新聞		大正五年五月一四日
孫逸仙を送る	太陽	二二卷七号	大正五年五月
黄興君を迎ふ	新日本	六卷六号	大正五年六月

支那の空へ

太陽

二二卷九号

大正五年七月

奇傑陳其美の死を悼む

雄弁

七卷七号

大正五年七月

支那女権大会

太陽

二二卷一二号

大正五年一〇月

世界外交壇の秋

太陽

二二卷一三号

大正五年十一月

秋葉散る黄興

太陽

二二卷一四号

大正五年十二月

去れる伍廷芳

太陽

二三卷八号

大正六年七月

雲暗し支那動乱

雄弁

八卷八号

大正六年八月

亜細亜の盟盃

太陽

二三卷一四号

大正六年十二月

函嶺の孫逸仙

太陽

二四卷九号

大正七年六月

瓜の黄花

太陽

二四卷一一号

大正七年八月

熱詩情史集

太陽

二五卷一号

大正八年一月

亜細亜の若き声

太陽

二五卷三号

大正八年三月

消失せし孫文の写真

太陽

二五卷一三号

大正八年一〇月

公孫樹と孫逸仙

太陽

二六卷一四号

大正九年十一月

江戸川の秋

太陽

二六卷一四号

大正九年十一月

支那統一の曙光

太陽

二八卷三号

大正一一年三月

文天祥と藤田東湖

日華学報

一一号

昭和五年一月

花血濃東亜の歌

日華学報

一二号

昭和五年四月

若き緑は燃ゆる

日華学報

一三号

昭和五年五月

夏の南北長吟短唱

日華学報 一四号

昭和五年六月

雲と石の賦

日華学報 一六号

昭和五年九月

中華民國供養大梵鐘

日華学報 一八号

昭和五年十一月

若葉と亞洲の会

日華学報 二三号

昭和六年五月

以上を一瞥すると、大正時代は主に雑誌「太陽」に、昭和に入ると、「日華学報」に掲載されている。周知のように「太陽」は一八九五年（明治二八）創刊され、廃刊は一九二七年（昭和二）であり、各界有力者、著名人が論陣をはった博文館の今日でいう総合雑誌である。<sup>(21)</sup>「日華学報」は一九一八年五月、中国人留学生のための組織で、学校、学寮を設立運営し、日中親善に尽くした日華学会の機関誌である。

山口昌男氏によれば、<sup>(22)</sup>「太陽」は明治時代が黄金期で、大正時代は教養主義的傾向が文化面に優勢になるにつれて、存在感は相対的に低下して行ったのだと。その意味では「明治代表詩人」で、大正時代は詩壇から離れた花外の詩が掲載されるにつかわしい誌面である。とは言え、「太陽」の主幹浮田和民は、内外の政治、社会、文明を論じ、「国際法上の合意に基づき、欧米諸国に向って十分自国人民の権利を拡張し、又た亜細亞諸国の独立を扶植し其の独立を扶植せんが為の亜細亞諸国の改革を誘導促進せしむるに在るのみ」という主張は、<sup>(23)</sup>花外の詩の核心となるにふさわし論旨であった。また花外と浮田は同志社で学び、ともに新島譲を共通の師と尊敬する点で相互に通じるものがあった。「太陽」誌上に花外の詩がしばしば掲載されるのもこうした縁と考えられる。昭和に入ると、一九三〇年（昭和五）に作詩が集中する。そのすべてがまさに一九三一年九月一八日のいわゆる満州事変勃発前夜で、まだ戦雲の影はなく、士気昂揚もない。

前述の詩題を順に並べるだけで、二〇世紀初頭の中国政治、日中関係を物語る叙事詩、詩劇が出来あがりそうである。

では花外をこのように中国、日中関係の作詩に駆り立てた動機は何か。その解明には作詩の背景である国内外の歴史的諸条件をたどり、ついで花外や同世代の詩人達が共に課題として受けとめた時代潮流及び花外をとりまく詩壇の動向を相互関

連させて考察することになる。

花外研究にそくしてみると、上田信道氏の児童文学研究からの指摘は示唆的である。<sup>(24)</sup>それによると、花外は「中学世界」の特集「予の二〇才頃」のアンケートに答えて、「少年時代より、文学を愛好せしかど。将来は、政治家を以て立身せん事を心に誓へり。身は一私学の学生ながら、いづれ未来は日本帝国の柱石を以て任じ、国家の堅固なる土台たらん志を抱いてゐた」と青春時代を回想していること、また作詩動機に関連しては、同誌の一九二五年二月号で、「他人の感化とか模倣とかいふことはない。ただ自分の情の行く処に任せ大胆に、自由に、奔放に諧調などは全然度外視し、欲するままに放逸に歌ふ事が感出来た」と書いて<sup>(25)</sup>いる。大胆、自由、奔放、放逸ということが花外の自認する作詩の基本的スタンスであった。そこから英雄、志士、義人、劍豪、軍人そして中国を主題とした作品が次々と生まれた。時には詩のみならず、冒険小説、英雄伝等も書いている。中国関連の詩は大体は叙事詩で、七五調、五七調の定形をとらず、行数にもとらわれず、大胆で、情熱的、自由奔放であった。

大岡信氏の詩論によると、花外は、明治三〇年代に七五調の「鶏の歌」で、世に認められた。「革命をそれ鶏の声になぞらへ歌はん乎」を一番として、「今われ歌をうたふ身は あやめもわかぬ闇の世に 自由の光輝きて 天地に充つる歡喜の 声湧く日をば待ちかねて 鶏と共音に歌ふかな」で終わる長詩を紹介して、次のように述べる。<sup>(26)</sup>

七五調は措辞の生硬さをうまく覆いかくす役割をはたしているが、また同時に、その口調の快適が、措辞の生硬さや常套的な表現を許容してしまう弱点を持つ。花外の作品にはその両面がうかがわれるが、この問題はひとり花外の場合にとどまらず、叙事性を持ち、語りの要素をもったやや長い詩篇に因って、ある人物の遍歴なりある思想の総括的表現なりを語ろうとするとき、詩人たちが必ずぶつかる問題だったとみられる。

中国関連叙事詩はまさに対象とする人物、すなわち孫文、黄興等群像の生涯、思想を総括することを第一義的といえよう。まず詩中に登場する人物とその頻度を調べると以下のようである。(一)内は登場回数。



孫文（六二）、黃興（三三）、陳其美（一六）、袁世凱（一六）、章炳麟（九）、李烈鈞（九）、蔡鍔（七）、宋教仁（六）、伍廷芳（六）、張勳（五）、黎元洪（四）、柏文蔚（四）、唐紹儀（四）、蔣介石（四）、陳天華（三）、秋瑾（三）、胡漢民（三）、倪嗣沖（三）、馮玉祥（三）、岑春煊（三）、張作霖（三）

二回は胡瑛、戴天仇、康有為、陳炯明、哈漢祥、張懷芝、王士珍、汪兆銘、何海鳴、安靜生、沈佩貞

一回は洪秀全、唐才常、劉揆一、史堅如、馬福益、鄒容、譚延闓、程德全、唐繼堯、徐世昌、張之洞、丁世鐸、李經儀、段芝貴、陸宗輿、曹如霖、陸徵祥、張繼、吳佩孚、馮玉章

未見の詩もあり、また詩に限定して、散文は対象としないので、完全なデータというわけにはいかないが、ほぼ傾向は現れている。大正時期の日刊新聞を見ると、国外事情として中国の政治動向の記事の占める割合は大きい。花外の作詩の資料、情報の収集は同時代の新聞・雑誌からであり、直接の中国文の関係資料、専門論述ではない。「読売新聞」、「萬朝報」、「太陽」、「雄弁」、「新日本」等の自分の詩文の掲載関係等から知識を得たものと思われる。

歴史研究サイドからいえば、梁啓超や張謇等の名も欲しいが、ともあれ一九世紀末〜二〇世紀二〇年代までの主要人物は登場して、中国近代史の叙述にはことかかない。特徴的には反清朝、反袁世凱運動に活動した革命勢力側を支持し、仇役は袁世凱であった。これは明らかに花外の政治姿勢の顕現であった。彼らの軌跡をたどれば、おのずと辛亥革命、第二、三革命時代の歴史経過の叙述ができあがる。語部とする所以である。

頻度をみると、孫文が圧倒的で一位、ついで黄興である。この結果は今日からみて、二人の中国革命上で果たした役割、そして孫文約一〇年、黄興約五年の日本在住という、それぞれの足跡からごく自然である。しかし三番目に陳其美が入っているのは興味を覚える。陳の一六回はただ詩だけに限ってであり、散文を合わせれば、もっと増加する。ところが専門家を別として、現在にいたるまで、陳其美は、日本人にとって、それほどポピュラーな人物ではない。にもかかわらず、一六回に及ぶのは何故か。花外の歴史観、人生観につながるものと思うので、後述したい。また「章炳麟君を弔ふ」は章炳麟が逮捕、

殺害されたという誤報から驚きと悲しみと怒りを爆発させ、一気に作詩したものである。花外の中国への関心が実にリアルタイムであることを表している。

詩の鑑賞から外れるが、興味を呼ぶのは、花外が度々あげる神田界限の様子である。たとえば「神田は広東料理の楼に我は登るとき、壁間横額」日暮郷関何処」と奇傑何海鳴の書あり」（「孫逸仙今奈何」と詠むが、この広東料理店や横額の行方はどうなったのだろうか。あるいは「消失せし孫文の写真」とはどのような事実をさすのか。大写真が掲げてあったのは何処か等である。史的事実の実証的研究が要請される。さらに神田界限の日中関係史上に果たした役割の歴史的意味である。これについては後述するが、詩人花外の神田界限への愛着を通じて、詠まれたもので、花外ならではの感を抱かせる。

なお蒋介石、汪兆銘も「日華学報」に登場するが、孫文や黄興に比べれば、大正期（民国初年）は脇役的な存在であり、また本論は大正時代を主題としているので、昭和期の蒋介石、汪兆銘との関連の詩は省略する。

## 二、「白雲」は孫文の顔

花外の詩文を通じて、措辞、修辭に注目すると、「自由」使用の頻度に気付く。前掲の三五の詩で計二六回の「自由」が使われている。では詩人花外が何故、このように頻繁に「自由」を言うのか。彼の詩文での「自由」の意味するものは何かと言うことである。しかし「自由」の含意するところは何かは、簡単な問題ではない。そもそもliberty, Freedomの訳語の適、不適の論議はもとより、その用例は多様で、かつ概念は多義的である。「自由」は近代日本の哲学、文学、史学、芸術、政治学、法学などあらゆる人文・社会科学から現実の政治、経済、教育、宗教などすべてにかかわる基本的理念にして、近代思想研究のキーワードである。

明治七年生まれの花外は幕末維新変革には直接参加はしなかったが、明治国家形成過程とその成行は花外の作詩の土壌で

あり、忽せにできぬ不可欠な実態であった。加藤周一氏によれば、同時代（六〇、七〇年代生まれ）の志のある青年、知識人の内面の問題は明治の日本社会全体の問題と一致していたと。そして彼らには西洋流の高等教育の最初の世代で、また漢籍素読の最後の世代であって、西欧思想の受容と日本の文学的思想的伝統との関連をどうするかを課題とする時代に成長したという。具体的には国内では自由民権、初期社会主義、対外的には国権主義、アジア主義などに直面した世代であった。こうした時代に詩人として成長した児玉花外の明治から大正時期まで、作詩の主題的措辞が「自由」ということは不思議ではなかった。例えば、先に紹介した「鶏の歌」（明治三二年）にも、「大塩中斎先生の靈に告ぐる歌」でも不可欠な用例として何度か用いられている。ここでの「自由」の概念は、第一義的には権力に対しての「自由」であった。つまり権力支配、収奪からの自由であった。また「鶏の歌」、「社会主義詩集」では、「自由」と同時に民権も用いられている。平等的意味合いで、農民、労働者、可憐児のように弱者への思いを込めた詩語としてであった。しかし大正期になると「自由」の用例が非常に目立ち、それに反して、民権は減じている。

具体的に「孫逸仙に与ふる詩」（大正二年三月）を対象にして述べよう。（以下詩の傍点引用者）

大正二年春風に梅花や、綻ぶ所

隣邦の巨人孫逸仙来る！

嗚呼多年自由の火の兎は獅子と化り

革命の大塊孫逸仙来る！

憲政の芽出度き春の風初めて吹出でし

日本の二月の夜は暖かに星燦き

隣邦の志士の獵虎附外套を快よく香はす。

以上の一連にはじまり、孫文の革命の道を歌い、最後の一〇連は次のようである。

君は詩のバイロン、政論のマヂニーか

今ま支那に国民党は熱烈に大總統に君を推す

理想家は布衣にして虚榮虚名を忌む

よし大總統の高職に就かずとも

一平民の思想家として世界を踏み歩め

嗚呼終生を暮らす不羈自由の一書生

男児生れて痛快回天の革命道楽も面白や

亜細亜は亜細亜自らにして治むべし

日支同盟は黄色の手と手に固く結び

孫氏よ壮快なる自由凱歌を吹け吹け喇叭を快調勇律に

嗚呼一世の鼓吹家よ無冠の革命王孫逸仙！

君乞ふらくは淹留二月春深く

日本憲政花開き、桜花を待って一枝を土産に還り給へ

詩文としては、措辞、修辭に美辭麗句、雅語には意を用いず、主題の人間孫文のイメージを膨らませるため、多様な歴史的事実を並べながら、物語的叙事的構成となり、語りの要素もある詩作となっている。他方生硬な用語も多く、五・七、七・五調の快いリズムカルさには欠けるが、情感はあり、朗々と吟ずるには、ふさわしいのではなからうか。かって明治三七年四月六日、大阪中之島公会堂で自作の「大塩中斎先生の靈に告ぐる歌」を朗吟し、好評を博したとことと類似している。

孫文を詠んだ日本人の詩として記念碑的意義のあることはいまでもなく、孫文賛歌は読者に、聞く者に孫文の邁進する革命的行為は伝わるであらう。しかし、この長い一〇連の詩を通じて孫文の政治思想と実践が果たしてどれほど認識され、

総括的叙述となっているであろうか。

この一〇連の詩で「自由」用例は八回である。民権は無い。「自由」は花外の詩心の凝縮した措辞といえる。しかし花外の「自由」の含意するところは、明治時期と大正時期とは異なるように思える。前者すなわち、詩人花外の門出の明治三〇年代には自由民権運動の余韻が存在し、反映したのであろう。専制的権力、圧制支配に対して「自由」の尊厳、「自由」の希求であり、明治時代の歴史的土壌から培われた叫びであった。いっぽう大正時代には、「自由」、「自由」とここぞとばかり、使用されている。しかし「自由」の一語はレトリックとしての措辞ないしは修飾語的使用となっていると思われる。例えば各連から拾って紹介してみる。

自由の火の兎、白雲は自由の鼓吹家、広東は自由の気鬱勃、南方は自由の気薫醸、自由の脱兎、自由愛国の喇叭、不羈自由の一書生、自由の凱歌を吹け、等々である。

「自由」がキーワードになり、孫文の足跡が総括され、叙事詩としてまとめられている。権力に対決しての「自由」の理念と希求は失われてしまったわけではないが、それより人間として、生まれながらの「自由」人としての孫文を謳歌するという点がより強く感じられる。明治三〇年代の社会主義詩人として花外の権力との距離、支配に対する認識、それにより生ずる緊張、怒、悲しみ等に起因する「自由」と離れてしまった。軽々な推論ではあるが、この変容過程は、花外の思想の内的「転向」ではなかったのか。というのは、この花外の権力との緊張関係の変化を裏書する一例を次に紹介しておく。

大正七年八月の出版であるが、花外は「嗚呼天才將軍<sup>28</sup>」の主題で、児玉源太郎賛歌の詩を書いている。児玉源太郎は花外の「社会主義詩集」を発禁処分をした当時の内務大臣であった。花外の「自由」に、圧制をもってしたことを忘却したのであろうか。何を回顧したのか。次のように詠んでいる。

「吾人は平凡庸の今日にして回顧し、児玉源太郎大將の驚くべき天才の偉力を憶ふ」（傍点引用者）。

「自由」との関連で、「白雲は自由の鼓吹家」という修辞がある。「白雲」は花外の好む措辞である。明治三十七年八月一四

日の読売新聞に日露戦争で戦死した坪内某（若き詩人）を吊した「白雲」という表題の詩が掲載されている。<sup>(29)</sup>六連五行で七五調の定型詩である。以下のように二、四、六連はいずれも雲が要の措辞で、最終連は主題の「白雲」である。

二 遼東の野に砲煙たち

詩神の雲に筆捨てて

国の賜ひたる劔を執り

火蹈み、血を越え、敵を追ひ

御国の為に倒れけり。

四 今宵は月の蒼白う

一片光る西の雲

故国の空へ君が魂

雲に乗りてぞ慕ひ来し

遺骨の郷にかへるさき。

六 悲しき風に翼して

高き消去る白雲よ

やよ待て淋しわが霊も

共に抱いゆけ、涙なく

春や霽れたる天つ国。（傍点引用者）

日露戦争時期のナショナリズムの高揚の中で、情感を漂わせる作品となり、明らかに「白雲」は親しき友を意味している。「白雲」に託して、しみじみと亡友に心をやっている。

中国関連の詩でも「白雲」が目にとまる。後に「白雲は孫文の顔を再現するが如し、日本の秋の空」（「消失せし孫文の写真」）という例もある。白雲＝孫文である。後述する陳其美へ贈る詩文では「白雲」は「兄」を意味するという。白雲は骨肉の愛、尊敬を含意している。

孫文の革命的生涯で15回の来日があったが、大半は亡命であり、華やかな、目立つような来訪はなかった。しかし、大正

二年の来日は、革命を成功に導いた指導者として、最も華々しいもので、日本全国朝野を挙げての大歓迎であった。したがって社会的関心の強い花外は欣喜雀躍として、詩作に取りくむのは自然であった。

花外は孫文を生身の人間として、感動しつつ、革命事蹟を追うあまり、生硬で難解な表現になるが、一言で言えば、詩人花外の感性からの、孫文賛歌である。その孫文の政治行動、思想的営みを総括し、凝縮された理念こそが「自由」であった。各連には史的事実が随時嵌め込まれ、孫文の生涯が巧みに描かれ、詩脈のなかに「自由」が活用され、饒舌ともいえるほどに、孫文を「自由」をもって情熱的に称賛している。しかし、近代アジアが生んだ最良の政治思想の三民主義（民族・民権・民生）については一言もない。それどころか明治期には見えていた「民権」も消えている。孫文の思想、政治的生涯の総括すれば三民主義といっても過言ではない。この点で歴史研究からの孫文像、孫文論とは明らかに相違している。むしろ詩人花外の孫文認識の特徴すなわち、革命理論や学説でなく、より身近かな人間孫文と喜怒哀楽を共にしながら、政治的行動の特性を詠むことに意義があるといえよう。その限りで、調子に乗り過ぎた感のする「男児生れて痛快回天の革命道楽も面白や」（傍点引用者）の一行も許されるだろう。「革命道楽」の孫文を規定ないし修飾する修辭は以下のようなものである。

「水飲み百姓、祖国の救世主、革命の事業家、布衣の理想家、平民の思想家、無冠の革命王」等々である。思想形成としては四、五、六連で「太平天国洪秀全を継承し、キリスト教を信仰し、医を学び、経国の志を抱き、亡命、血惨史を重ね、大革命を成就」等々である。

ところで花外自身の生き方を投影して、とくに唱いたかったことは、「孫文は詩のバイロンか、政論のマッティニー」の一行ではなからうか。というのは、後に黄興を詠んで、「詩人は革命の侶伴」に関連する。すなはち花外が憧憬する維新の志士達の多くが詩人であり、歌人でもあったことである。花外は高杉晋作、雲井龍雄を敬愛、思慕して詩作<sup>(30)</sup>していた。この意味で「孫文はバイロンにしてマッティニーである」と詠んだのである。「真の詩人は革命家」と言いたかったのだろうが、我と我身を顧みて、一歩さがって、「詩人は革命の侶伴」としたのであろう。

一連、一〇連に「憲政の芽出度き春」、「日本憲政花開く」は、丁度、孫文来日の時、憲政擁護運動の真っ最中で、二月一日には群衆運動の高揚で、桂内閣は辞職を余儀なくされていた。花外はこの日本憲政運動と革命家孫文を重ねていた。この点は既に野沢氏が指摘している。

この「孫逸仙に与ふる詩」の半年後に、「亡命客と日本」を書いている。僅か半年の歴史の推移が背景にあった。孫文来日中、同志の宋教仁が上海で袁世凱の兇手により横死のニュースが入り、孫文は急遽帰国する。この事件をきっかけにして、孫文は反袁世凱の第二革命に立ち上がったが、敗れ、孫文、黄興等は日本に亡命を余儀なくされた。しかし半年であるが、敗者の孫文や黄興等への日本側の対応は、手の平を返したように、冷やかに変わってしまった。しかし、花外は変わらなかった、いやむしろ敗れた彼らの庇護を、高唱するのであった。

この姿勢は同時代の対外硬派のアジア主義的立場の政客、浪人達との共鳴、共感であった。後の作詩に犬養毅、頭山満、水野梅暁等が詠まれるのもこのあたりが源泉であろう。恐らく経済的実践的援助をすることはなかったが、「流落の志士を迎えたい」の気持ちで「亡命客と日本」を書いたのであった。作詩は経済的実践的援助に比較し得ぬ次元の不滅の遺産といえよう。最終一〇連のみ紹介しておく。

五尺の軀を四百余州に容る所なく

自由なる燕の如く東へ東へと続くか亡命客

我国は小なるも俠義に広く匂やかなり

千屋萬家は夜にも戸を開けて遠客を待つ

吾れ愛南に刺激されつつこの詩を綴る十三日

天沛然として雷と痛快の銀箭の驟雨の到りつつ

枯死せんとせし農作甦り山野草木皆な潤ふ



埃及、印度、比律賓、土耳其、はた支那や、

亜細亞大陸の久しき人類の早魃に恰も祝福の降るに似たり

赤き夕雲虹の如く東より南へ架るに歎喜しぬ。

孫文は「自由なる燕」は「自由な兎」など動物に仮託される。そこには前述したように社会的制約から離れた自由自在の孫文、意の赴くまま人間の規約から解き放された孫文をイメージしているのであった。

「明治維新は中国革命の第一歩」と認識する孫文は、花外にとって、自由自在に飛び回る英雄と映じた。叙事詩退潮期にあつて、「時代遅れ」と言われようと、花外は使命感と熱血をもって、独り、「俠義」に依るアジア主義を掲げ、不平等条約撤廃に立ち向かっている中国革命家に、叙事詩を敬呈しているのであった。

### 三、一九一六年——吾は西隣に向ひ全亜細亞主義を絶叫す——

先の目録をみると、一九一六年（大正五）に作詩が集中していることに気づく。「地の一角を踏へて」は年頭の作である。一九一六年（大正五）は「国民活動の歳」と詠み、新しい時代の胎動を感じて、日本国内に刺戟のないことに対して、中国の国民的活動の発展を期待したのであった。反袁世凱運動、後にいう第三革命勃発への予見であった。以下に四連からなる叙事詩をみよう。（傍点引用者）

地の一角を踏へて

国内は刺激なきこと既に久しく

西隣大隣に革命の烽火また揚るを望み

公孫樹の黄葉落ちつくしたる

東京の巷路に雙手を挙ぐるは誰か男をや

波の騒ぎにも熱き情緒は轟き動き

亜細亜のための亜細亜主義を唱ふは誰か声ぞや

現実には火か、人生は煙か、時は迫り来れり

今や世界の擾乱に投じ戦はんと欲す。

大正五年は国民活動の辰の歳

黒き土に五尺の人間が呼吸して

風雲を捲起すの爽快さを考ふ

高く懸る青雲もあり眼もはるばると際涯なし

春衣のうちに壮心湧きて止みがたし

覇氣と野心は身も天外に飛ばんとす

小児の青天に風を揚ぐるを看ても

思想の糸を伸ばし、永遠より未来をつなぐ

国民活動の指導者としては、蔡鍔をあげ、原動力と期待したのは若い留学生であつた。

蔡鍔については「秋葉散る黄興」の一節に

君は唐繼堯と共に雲南四川に兵を挙ぐ

今次の革命戦に魁第一

君は黄氏と湖南に生れ、同じ革命に殉じて死せり

黄興氏は四十四、蔡鐸君は三十五

と。蔡鐸は第三革命の魁第一と称えている。

当時留学生については、さねとうけいしゅうによれば、五、六千人の留学生が滞在していたという。花外は「支那留学生と驕燕の巢窟 吾は東京神田の街に住む」(大正五年六月)と詠む。花外にとって、日常もっとも近い存在の中国人は神田界隈を「多く群がりし処」、「古巢」とする中国留学生であった。東京府の統計によると、神田に二六三人(男二四一、女二二)、麹町に一三四人(男一一一、女二三)が居住していた。全員が留学生とは限らないが、花外が期待した若い留学生たち(33)が、一定の狭い地域に、集中していたのが神田界隈であった。

中国歴史上、いかなる都市にも、神田界隈のように、若い志を抱いた数千の青年が、正に指呼の間の地域に集中した歴史的事実はない。神田界隈は中国革命の揺籃地という歴史的意義に値すると思う。花外が愛し、住み、散策し、千鳥足で放浪した神田界隈であった。花外の時代感覚は、直感的で、大胆ではあるが、神田から遠く中国革命の烽火に望みを託したのである。わけても女子学生には希望をよせていた。

「支那婦人に」は読売新聞(大正五年五月一四日)に掲載された五連の詩である。その四、五連以下のようなものである(傍点引用者)。

編んで垂れたる長いのは

五月の髪にふさはし

神田に柳はあらねども

君がつやけき黒髪を

燕と共にふりかへる

広東は自由女の生るところ

立憲の花を植ゆ新婦人

吾は神田の街にたち

革命婦人とそと呼ば

頬は紅に染む五月空

この二連は七五調で、花外の常套語である「自由」、神田そして燕が生かされている。この女性に期待する作詩は、「太陽」の主幹浮田和民が歴史の発展を展望するのに、社会的矛盾（貧困、社会悪）の根絶と婦人問題（男女の差別、女権拡張、婦人参政権、女子教育）を主張<sup>34</sup>していることに対応していると考ええる。

例えば「太陽」（大正五年一〇月号）の「支那女権大会」をみよう。これは第一連の「多くの男子が心血を濺ぎし第三次革命後」から始まる叙事詩である。（傍点引用者）。

神田の街と空気は支那留学生に親し

篠懸の並木の青に衣裳を照させて

若き支那女学生の往来する可憐の姿に

萬斛の同情を靴の先にまでも注げり

茲に我医学校を卒へし、腕さゆ女よ<sup>35</sup>

光るメスを振るって、祖国の女の病弊を治療せよ

芸術家は歌に語に、急進熱血男子を刺激し

東亜のために強き色彩を添へよ

吾は神田の二階窓を、青空に開放ち

隣国より波を伝うてひびく喇叭のやうに

支那女権、全国同志大会の消息を聞く

秋風が涼しくリンリンと吹き鳴らす

赤い硝子球の風鈴の下にて

全世界の新らしき女の運動を祝福し

わが未開紅女の発奮を促してペンを駆る

ところで文学史上で、大正五年前後はいかなる状況であったのか。門外漢の管見の限りで、しかも一知半解の先行研究整理であるが、文学（小説）については、中村光夫が鷗外、漱石、荷風、谷崎等などの作品を挙げで、大正五年が「文学史上で一種の分水嶺を形づくっている面白い時期」と指摘している。<sup>(36)</sup>一方詩界では、大岡信氏は大正時代の詩と詩壇について、前時代（明治）との断絶を指摘しつつ、次のように述べている。

大正期の詩は、にわかにその持続性を見失い、あるいは持続性そのものがいくつにも分岐して弱まってゆくという過程がみられる。氾濫状態となつて大正中期の詩界を覆い、……樂天的で放漫な自由詩の拡散運動が、こうした趨勢を導き出した主要な原因であつたことは、否定しようのない事実であらう。しかも、口語自由詩の時代的必然性と合理性はうたがうべくもなかったために、放漫な自由詩に対して嫌悪と反感を持つ一群の詩人たちは、ことさらに高踏的な立場に身をおくことによつて、必要以上に孤立した世界へ彼ら自身の詩を閉じこめてしまったようである。<sup>(37)</sup>

花外の大正時期の詩は、大岡の文では、どこに位置付けられるべきであらうか。「樂天的で放漫な自由詩の拡散運動」のいずれかの一端を占める筈である。

また大正期に「民衆詩派」が登場したことも近代詩史上では重要な特徴として指摘されている。白鳥省吾の『現代詩の研

究』には「民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底力ある開花期を示したのはやはり」民衆“発行の頃である大正七年である”と。<sup>(38)</sup>

では「社会主義詩人」あるいは社会派詩人と称された花外とこの新登場の民衆詩派と接点は何なるものか。

田中清光の『民衆詩人の軌跡』<sup>(39)</sup>では民衆派詩人は彼らが視線をおいていた西欧の自由、民主思想も「移植観念として終わったところがある。やがての国内の社会、思想の激動がかれらを呑みこみ、その自由や平等という理念を空想的なものとしてせしめずにはおかぬ歴史的現実も訪れた。しかしこのことを詩の問題の方から見ようとする、新しい理念や使命観を思想的言説として述べることに酔いしれた一方で、それを内面化する観点に欠けていた脆弱な点が、やはり問題にならざるをえない」(傍点引用者)と鋭い、刺激的な指摘がされている。花外の叫ぶ「自由」も同様な日本の現実の中で考えざるをえない。大正期花外の叙事詩の運命はこの田中が述べる興味深い指摘と不可分と思われる。中野重治と安東次男の二人は座談の席で、<sup>(40)</sup>大正の叙事詩は「どうにもならん」と語っている。これも同様な次元の問題なのだろうか。以上の文壇、詩壇の問題は哲学、歴史、政治、社会など人文、社会科学全般にわたる日本の文化、思想にかかわる問題と思われる。第一次大戦は「西欧の没落」の表現されるように、世界の将来に深刻な精神の危機ともいえる内面的転換を要求された時期であった。しかし日本は戦争の利益を享受して、現実には安易な対処の仕方でも乗り切ってしまった。自由、平等、民主、平和などの理念は現実と離れて空想的な受容として止まったといえる。人物の遍歴・史的事実を総括的に描写する叙事詩を貫くべき思想・理念が脆弱な表現のみにとどまってしまったと考える。この安易な対処は、明治時代に不平等条約撤廃を国民的課題とした厳しい現実への対処とは異なっていた。

ところが、大正時期、アジア主義の発露は、第一次大戦を背景に地理的に至近距離にあった朝鮮・中国への膨張政策となつた。大隈内閣の対華二一カ条要求を想起すれば足りよう。この時期の膨張主義政策、満蒙問題、列強との関連等、国際的国内的諸条件は、非常に複雑多様で、日本の対中国外交もいわゆる二元、三元外交に陥っていた。この間、対外硬派・大陸

浪人は権謀術数暗躍で拡大主義を繰り広げるが、「純なる詩人肌の男」で富も地位も野心もない花外のアジア主義は、政治、経済に踊ったいわゆる大陸浪人とは、似て非なるものであった。しかし、残念ながら花外には孫文への傾倒、賛歌はあるが、二一か条の反対から中国の土壤に生まれつつある新動向には目をむけなかった。あるいは気づかなかったのか。

専制清朝打倒した共和国体制はたちまち、袁世凱の暗黒政治の復活となった。この深刻な現実の政治状況に、中国知識人は、たとえば「新青年」を創刊し、民主と科学を唱え、新文化運動へと高揚し、二一か条反対、五・四運動という国民的覚醒の時代をむかえた。吉野作造など一、二の知識人を除いては、この新動向を認識できなかった。

むしろ花外の詩心に刺激的であったのは、一九一六年、中国の実力者の相次ぐ死亡であった。旧政客の袁世凱、盛宣懷そして革命派の陳其美、黃興、蔡鍔等である。留学、亡命で日本と縁の深い革命黨員はいずれも志し半ばで倒れてしまった。わけでも陳其美の暗殺は衝撃的であった。「国民活動の歳」は愛する中国革命の群像との訣別の歳となり、惜別と哀悼の叙事詩作成に花外は専心することになった。

#### 四、奇傑陳其美の死——「凄味の村正の銘劔」——

革命黨員の幹部の一人陳其美の暗殺が「奇傑陳其美の死を悼む」（「雄弁」大正五年七月）という詩文となる。

陳其美（一八七七—一九一六）は一九一六年五月一日、上海フランス租界山田純三郎宅で袁世凱配下のテロリストの凶弾に倒れた。花外は「赤新聞の夕刊を何気なく見入った私は、不意の驚愕に、全く胸が潰れた。陳其美上海にて暗殺さる！この二号活字の一行に私はビックリして、哀しいが涙さへも出なかった」。赤新聞とは夕刊萬朝報であった。大正五年五月二〇日の「陳其美暗殺さる」の記事である。その後、同新聞の五月二五日、二六日には上海夏積生の名前で「陳其美暗殺の現場」、「噫陳其美」が二日続きで、現場図解入りで、掲載された。花外は貪るように読んだ。ちなみに東京朝日新聞（大正

五年五月二四日から二七日）には上海特派員山中未成（山中峰太郎のこと）が特電記事で事件の詳細を書いている。衝撃をうけた花外は一気に書きあげた。

屋根と屋根とが押迫って、其間から青空——詩人の故郷と私のよぶ——と飛付たい程に懐かしい白雲（之は私は兄といはう）が見える。神田の二階のひともし頃、さびしい、遣瀨ない瞳を、幻想の国の魂の如な、電球にぼんやり向けてゐた。赤新聞の夕刊を、何気なく見入った私は、不意の驚愕に、全く胸が潰れた。陳其美上海にて暗殺さる。此の二号活字の一行に、私はビククリして、哀しいが涙さへも出なかった。

若い革命家の、流された鮮血を直覺して、電灯も、新聞も、畳も、私の部屋中がみな、陳其美の紅血で以て染め塗なぶされた如に、障子までが真赤に見られた。そして、涙よりも熱いものが、この両眼を充たした。

噫、若い陳其美 陳其美は、支那の革命黨員の中でも、私の第一番に好きな漢であった。吁あゝ其陳其美が、五月一八日の夕に、上海の客舎で、北方の兇漢の毒手に、殪されたのだ。私が、常日頃に、陳其美をどの位に愛し、どの位に嘆賞してゐたか、渠を支那の丸橋忠弥として、私は、こんな詩を作った位である。

その詩は五連からなる叙事詩である。その三、四連を紹介しておく。

新聞記者出の若き陳其美よ

疇むかし昔は忠弥は鎗の先生

現時君は筆も生命も棄てる覚悟

祖国の為に四方に活動す

之も支那のため全亜細亜のため

憂哀四百余州の民族を思ふゆゑ。



第二革命の華々しき其際よ

爆弾抱いて恐怖なく

数丈高い煉瓦塀を跳込みて

大膽突飛に内外を驚かせし

壮烈極まる上海の一芝居

容貌婦人の如き陳其美よ

君は今支那の新しき忠弥か

陳其美の略歴を述べておこう。浙江省呉興県生まれ。少年時代に質屋と紡織業の手代をした。向学と救国の志を得て、一九〇六年、日本留学、警監学校から東斌学校（私立の軍事教習所）に学び、この間、同盟会に参加、一九〇八年帰国、上海や各地で革命運動に従事した。秘密結社に接近すると同時に、「中国公報」、「民声叢報」、「民立報」などの創刊にあたり、革命宣伝に尽力した。一九一一年七月には中部同盟会の幹部になり、上海で商団、青幫などの武装集団を組織し、決死隊で江南製造局を攻撃した。ついで南京を押え、上海都督になった。民国成立後、革命派の有力な指導者陶成章殺害の疑いがかけられた。しかし第二革命で反袁世凱軍総司令として江南製造局攻撃、後、日本に亡命した。中華革命党結成（一九一四年）では、同志の対立の中で、孫文擁護に尽力し、反袁闘争を続けた。しかし中華革命党結成時に、孫文に絶対服従する誓約書捺印を厳しい態度で同志に迫った。こうした圭角に富む性格は黨員からの人望に欠けるところがあったと思われる。

しかし、日本側からは孫文や黄興につぐ革命党の活動家とみなされ、とくに孫文の第一の腹心として、遇されていた。一例に過ぎないが、陳其美と親交のあった代議士菊地真一の夫人の語るところによると「色の蒼白い弱々しい様な方で夫などは革命党のなかでもあの位の人物は少ないと褒めて居ますが、とても革命などに奔走して居さうに見えません。何処か人懐

い処のある人なので宅の子供なども非常になづいて居ましたので、今度の変事を知らせますと、『陳さんが死んだのか』と泣いて居ました。書の上手な方で宅にも額面へ揮毫されたのが残って居ますが、その落款亡人陳其美としてあるのが何だか変事の前兆のやうに寂しく眺められます」（『読売新聞』大正五年五月二〇日）

花外に陳と直接の交友があった形跡はないが、生い立ち、風貌、人柄、活動ぶり等については承知していたにちがいない。陳に魅せられるところがあった。だから暗殺のニュースを知って、詩人らしく「私の一番に好きな漢」といって、追悼文を草し、詩を捧げたのであった。ところで陳其美の死を悲しむのに、花外は陳をなぜ丸橋忠弥になぞらえるのか。すでに二カ月前の大正五年三月の「冒険世界」に「丸橋忠弥と陳其美」を掲載していた（未見）。

詩人花外の陳其美像は自己の情熱の赴くまま、丸橋忠弥に仮託して描かれ、歴史的に実像が定かでない丸橋忠弥である故、その比定はゆるされよう。<sup>(41)</sup>そこで花外の陳其美像形成過程を、恣意的ながら、構成してみると、以下になるろう。

忠弥は徳川幕府打倒を策した慶安事件（慶安四年＝一六五一年）の指導者の一人であり、江戸で塩硝蔵に火を放って混乱を惹起して、討幕を断行しようとしたという。この行動が陳の辛亥革命、第二革命の際、先頭をきり、上海で江南製造局を攻撃したと並べられる。いうならば二人は権力打倒のための「急先鋒」の役割をになったのである。もともと史的事実がはつきせず、潤色が多いが、丸橋は宝蔵院流の槍の使い手で、お茶の水あたりで道場を開いていたという。行動の豪胆さ、直情的そして何よりの酒好き等が由比正雪や一味同志から誤解され、共謀の熱意も疑われ、ついに幕府の追手に逮捕され、鈴が森で磔刑された。

思想的な点では、花外は陳が「平常からの持説として、支那と日本とは大亜細亜主義の大傘下に握手せねばならぬ此の大亜細亜主義の完成のため、東洋永遠の平和の為に、支那は何うしても日本に頼らなければならぬ」というアジア主義に共感している。孫文叙述で頻発した「自由」の用例は消えて、代わって、アジア主義が積極的な格別な一語となって来ている。

陳は容貌が女性的、優しく、花外も同様な優男である。二人の写真を見比べて、確かによく似ている。この陳其美が容貌

に似合わぬ激しい行動に飛び込む姿にほれ込んでしまったのであろう。花外は書いている。

革命党の急進派として、余り華々しく行い過ぎたので、其の結果同志の間にも誤解されて、悪ざまに評判された。噫けれども、夫れが何だ、誰が何といっても関はない。若い陳其美は村正の刀だ。余り性格が切れ過ぎた。……血氣な陳其美は、凄味の村正の銘劔だ。支那大陸に進み過ぎ、切り舞はり過ぎて、反って反対派のためにヤラれた。私は、陳其美といふ業物が、未だ若うして夙く夭折したのが悲しい。

こうして陳・丸橋そして花外の三者が、留学生の活歩する神田を舞台として、酒を潤滑油とする共鳴盤が成立し、次の叙事詩誕生となったのではなからうか。村正妖刀説まで引用する追慕の念は、美辞麗句は少ないが、陳其美エレジーとして、日中関係史上、一頁を飾る貴重な記録である。陳其美以て瞑すべきか。ただ残念ながら三連の「大森の曙楼」の「艶聞」については知らない（傍点引用者）

神田の町は驕燕と支那人の巢窟

一步踏出しや男女の異装者留学生

日本留学生の時代には若き陳其美

祖国を思ひ書物片手に歩きけん

眼鏡の中の光る美眸をいまも見る如し

今日街路に初夏に繁る青い鈴懸の葉

旺んなる緑を匂はす葉々の蔭に

若き革命家の熱情の顔が覗くらしう浮ぶ

青葉しげれど夙く死にたる陳其美が哀し

神田の土を踏めば吾も陳其美となる心地。

五月の末の日、神田に風吹く日

中華第一楼に吾は登り

支那の丸橋忠弥を弔ふに吾も、忠弥をきめ込み

陳氏を嘆き独りして酒酌む

怪男児の一生を懷へば感慨無量

陳其美の英姿は盃中の波に泛び

紅い強烈の支那酒は宛ら血の如く

其上に熱涙そそぎて小き海をなせり

奇傑を悼む革命歌をうたへども

吾声は哀調を帯びて極めて低し

革命に殉ぜし若き東洋の志士のため

波も悲しめ上海の客室に

兇悪の北国人の撃放つ弾丸に

憐れ若き陳其美は殞れたり

美男子の右半面が硝煙に凄い紫色

惜い血を流せしが、半生に艶聞も伝はりぬ

大森の曙楼の女中よ、吾と共に泣け

愛しい陳さんは花の三十八で散られたり

革命成就して支那大陸の曙も見ずに

犠牲的英雄は夕焼なくて沈む死の淵。

## 五、黄興——英雄と詩人は永遠に同伴なり——

花外は、黄興について、多く詠んでいる。わけでも一九一六年（大正五）の作品には、人間黄興の魅力描写に満ち満ちている。「黄興君を迎ふ」、「秋葉散る黄興」の二つの長編叙事詩である。先の、「孫逸仙に与ふる詩」（大正二年三月）の第八連では「革命將軍黄興、黎元洪、袁世凱、英傑雲の如し」と、群雄の一人としての列記に過ぎなかったが、同年七月の「支那南方に寄するの詩」になると、黄興への関心は高まり、叙述もはるかに豊かになる。第一、二革命と黄興の役割の重さを認識していったからであろう。例えば同詩の第一連に「わが愛す孫逸仙、黄興、胡瑛」、第二連に「上海にある国民党首領黄興よ、孫逸仙よ」とうたい、四連では黄興の生誕の地湖南省を称え、「此地や黄興や宋教仁や革命家の故郷、湖南 湖南 其地称や真に愛すべし、湖や南や詩的にして広くあたたかなり。茲に英雄起り男子立つ偶然にあらじ」等々である。黄興への愛着は益々強くなる。日夏耿之介が中国革命に関心を持ったことは知らないが、花外の詩中から黄興の叙述がとりわけ目についたのであろう。次ぎのように書いている。<sup>(42)</sup>

彼（花外）の社会主義的口吻を聴くけれど、もとより社会主義の理論に出発した哲学的思惟の叙情的発声があるわけではなく、英雄を弔ひ、光秀に同じ、黄興に感じ、バイロンを讀すると等しい無思想な普通人の大ざっぱな感慨にすぎない。

（傍点引用者）

黄興は一九一六年、アメリカ亡命から、日本を経由して帰国、間もなく上海で革命の生涯を閉じた。日本の新聞各紙もこ

ぞって、彼の功績、人柄、エピソード等を掲載した。「黄興君を迎ふ」(六月)はアメリカからの帰途に立ち寄った時、「秋葉散る黄興」(一二月)は黄興の訃報を得てからである。新事実の発見はないが、一九一六年の黄興を詩に詠んだ事実は貴重である。その前にざっと黄興の略歴にふれておこう。

中国近代史上、革命的民主主義者として生涯を貫いた黄興は、孫文の最良の同志であった。約一五年間の革命活動の内、八年二カ月、国外亡命生活を続けた。日本には約五年半滞在した。革命活動の三分の一であり、非常に長い。それゆえ日本人との交友もふかく、知己も逸話も多い。湖南長沙の生まれで、宋代の著名な詩人黄庭堅の末裔といわれる。黄興自身も詩は巧みで、書は北魏風である。この文人的趣味は孫文とは違っている。更に射撃術に優れ、囲碁が強く、日本酒を愛し、浴衣も好んだ。文武両道の好漢で、したがって、日本の各界の有名人、指導者等から評判がよかった。風貌が西郷隆盛と似て、自身も尊敬していた。宮崎滔天は誰よりも黄興と親密で、家族ぐるみの交際を続けた。

この経歴と人柄、また常に革命の現場で先頭にたって指揮した黄興は、花外の好みで、また敬愛していた。孫文は「先生」であったが、黄興には「黄興君を迎ふ」で「君」づけで親しみをこめている。一〇連八行の長い詩である。ただし第一〇連は一〇行で定型をとっていない。二行の超過は「ああ来るも往くも、志士の為に祈る支那革命成功万歳」である。亡命先のアメリカから日本によって工作活動をして、上海にもどり、第三革命に献身しようとする黄興を詠うのであった。孫文の叙述と対比してみると、措辞として、孫文を修辭した「自由」の用例がないことは、実に対照的である。花外の孫文、黄興についてのイメージは孫文が理想家、黄興は実践家と一般に流布していた認識によるものと考えられる。すなわち黄興像の形成は政治思想、理論等とは無縁な行動的人物という印象が先行し、そのために黄興の前述したような日本人好みの人柄、風貌、度量などが、花外を刺戟し作詩の主流となったのである。しかし決して日夏のいう「大ざっぱな感慨」でないことは断言したい。

「黄興を迎ふ」では「男鳴りする五月の汽笛」で始まり、もっぱら黄興のパーソナリティが中心である。「湖南の男児は

義に勇み皆強し、黄氏一たび黄の巨手を挙げば……忽ち一〇万の兵雲の如く群集り」「支那の西郷隆盛」等である。端的に  
いえば、強さ、勇らしさ、「義」が黄興の表象する措辞の一つである。一〇月三十一日、黄興の訃報を知り、次の長詩を作っ  
ている（傍点引用者）。

### 「秋葉散る黄興」

秋は悲しや、東方は殊に秋風秋思ふかし

十月三十一日、星影青白き午前四時

『黄興氏上海に於て逝く』

急電は火燕のやうに全世界に伝はる

渠が一生は国家民衆のため奮闘碎身の連続

燦爛<sup>さきた</sup>民国政体の確立に先ちて独り冥闇に入りぬ

理想家の孫逸仙と、支那名物男として謡はれし

実行派の巨擘、革命の巨花黄興死せり

黄興氏の一代は、火と血と剣の活歴史

光緒二十五年、唐才常と挙兵<sup>\*</sup>を皮切に

光緒二十七年、花と武と義さく日本に來り<sup>\*</sup>

章炳麟、陳天華、宋教仁、劉揆揆一等と「華興会」<sup>\*</sup>を起し

三十一年、三年、四十三年、遊説に、暴動、攻撃に遑あらず<sup>\*</sup>

遂に第一革命の武漢に、赤く爆発するや

※光緒廿六年（一九〇〇年）の自立軍挙兵

※光緒廿八年（一九〇二年）春來日

※一九〇四年成立した革命結社

※年代は年号不明で確認できない。

漢陽漢口に転戦大功、大元帥となり

南京政府に陸軍部総長兼参謀長に任ぜらる

後、宋教仁事件に袁世凱と衝突し、米国に放浪

黄興の抱擁力は海のやうに広く

其の膽力は生々、山の如くに重く

徳望は花と高く薫り、友党部下を酔はせり

先辛万苦、劍か縄、身は幾度か危険に頻し

一代怪物袁世凱の毒黒手も、赤誠真実の人に及ばず

功名も、義の為に、生命も土塊どくわいの如く思ひ

南北協和政府が、勲章贈るに答へ

『同志の白骨を胸に佩びるのは嫌だ』

一語凜然として、後世栄達家を愧死せしむ

黄興は、命がけ革命道楽の外に

撃劍、囲碁、正宗酒、書、東洋の趣味

国事を劃策す少閑に、植木盆栽をながめ

殊に日本の幽雅濃淡菊の花を愛したり

渠が死せしは恰も東方に、紅菊の花咲く頃



同志志士が血を<sup>そそぎ</sup>濺成る民国政府の建設半ばの瞑目よ

広東で怪我したる時、波ひびく寢台に横はり

日本の浴衣を着たしと願ひし人、酒落の快男子

※黄花岗拳兵（一九一一年四月廿七日）

革命と波、英雄と詩人は永遠に同伴なり

上海佛租界の「霞飛路」の街の窓より

赤き雄魂は弾丸のやうに、秋の蒼空に飛びぬ

最初革命の旗破れ、其身は張之洞一味に捕はれ

知人の獄吏の情に遁れしも、上海の獄舎\*

※「張之洞の獄舎」の事実なし

櫛風沐雨十八年、祖国に新生命を与へんと

南船北馬に狂奔し、旅の衣も塩と土臭き幾歲月

今も雲の上に、君の名は清く鶴の如く舞ふ

吁嗟、黄興々々！其名の短的に男らしさ

折しも日本の秋に、公孫樹は黄に染みて美はし

吾は夕陽の銀杏樹の幹に凭れて

英雄の艱難の生涯と、悲壮の末路を懷ふ

君は西郷南洲の人物を、火の如く敬慕せり

堂々二十三貫の堅忍不拔の支那の豪傑よ

今上野の秋に、南洲の銅像に銀杏樹<sup>いんぎょ</sup>が散りて照す

黄興が記念像は、須らく揚子江畔の波打際に立つべし

門柱の標札にやさしく『中田』と書いた

黄興氏亡命当時の目白の隠家<sup>\*</sup>

老母と正夫人と主人が調度道具も涙の種

末女節子が花モスリンの支那服は愛憐

暁星中学二年の次男厚端よ、若き支那の星となれ

同志孫逸仙、宮崎滔天も血族の家人さへ

同居ながら、突如の胃潰瘍の急変に

枕頭、淋しく死に目に遭はざりし悲劇よ

古来奇傑は、孤独に生き孤独に死するが運命か

ああ南方、南といへば太陽に熱き涙おつ

黄氏が故郷、湖南人の発起にて

秋十一月五日、帝国教育会講堂にて

留学生の追悼会は菊花を飾りし十八日

大手町の大日本私立衛生会にて、盛大に行はる

香典料二万元、国葬費五万円、儀仗兵も何等の光栄ならじ

※現在東京豊島区西池袋二の一五。

逝し国土黄興氏には祖国民の真自覚と涙一滴にて足れり  
曾て生前三十万両の懸賞の首が、今や天下の惜む宝物

吾は此弔詩を綴る十一月九日朝

「蔡鍔死す」新紙を見て手は顫ひぬ

噫支那革命青年党の首領蔡鍔は

福岡病院にて癌を病み、痛浪のやうに死す哀れ

袁氏が帝政を布き、皇位に登るや

君は唐継繞と共に雲南四川<sup>\*</sup>に兵を挙げ

今次の革命戦に魁第一

君は黄氏と湖南に生れ、同じ革命に殉じて死せり

黄興氏は四十四、蔡鍔君は三十五

吾は神田篠懸の青葉の蔭にて

陳其美の横死に泣き、今黄興、蔡鍔の死を聞伝へて悲む

嗚呼、天東方に幸せず、将星しきりに隕つ

独り民国のため太だ惜しむのみならず

黄色人種中に、非凡傑物を失ふに嘆く

黄君が平常に口癖のやうに

※雲南での護国軍挙兵

「東洋の事は日支親善に俟ねばならぬ」

東方の波と波、人と人とは固く手を握れ！

黄興氏、吾は此の熱ある一言、在天の英霊に捧ぐ

第一連の「実行派巨擘」は「孫文が理想家」との対比である。二連は黄興の実践を「火と血と剣の活歴史」として彼の軍事的活動を順に叙述する。三連と四連は面目躍如である。黄興が孫文以上に日本人に親しめたことが背景にある。文武両道である。そして「功名も義の為に、生命も土塊の如く思ひ」という。

第五連が花外が言いたかった修辭ではないだろうか。「英雄と詩人は永遠の侶伴なり」はバイロンにあこがれた花外の叫びであろう。逆は真ではないが、「ほんとうの革命家は詩人である」と言われている。花外はせめて革命家の伴侶でありたかったのだろう。

その後の各連で黄興の風貌や日本人との交友の事実を詠う。そして九連と最終連で、一九一六年（大正五）の画期点として、「陳其美の横死に泣き、今黄興、蔡鍔の死を聞伝へて悲む」そして「黄色人種中に非凡傑物を失ふに嘆く」、「黄君が平常に口癖のやうに、東洋の事は日支親善に俟ねばならぬ」と。

花外の黄興認識には孫文を理想家、思想家と認識するのに対比して、実践家というのが前提である。したがって、花外の得意な人間、パーソナリティを巧みに物語的文脈で叙事詩にまとめたことで、成功したと考える。

古語、雅語を駆使した絢爛たるロマンティックな詩とは程遠いが、黄興の生涯、思想、風貌を情感こめて、見事に伝える叙事詩である。詩人花外の中国関連詩は一九一六年が頂点であった。

黄興への追慕は今も鶴見総持寺に聳え立つ、犬養毅の筆になる「黄君克強の碑」について、三連四行詩とする。その最終連は、

故郷長沙に眠れる黄興君

英霊恋ひしくば東海へ

雲に乗りて通ひ来れよ

碑は温かなり総持寺

と。

## むすび

大正時代の花外の中国関連詩を専ら対象として論じてみた。「太陽」や「読売新聞」という有力雑誌や新聞に毎月のように飾った花外の叙事詩は詩壇からは無視されていたが、果たして、一般読者に、どのように受けとめられたのか。愛唱、吟詠はされたであろうか。反応如何は関心のあるところだが残念ながら、明らかにできない。

大正五年前後は第一次大戦下の東アジア、わけでも二一か条要求で中国問題がクロージアアップした画期的時代であり、世相は景気に酔いしれた時代であった。「天性の詩人肌」の花外が唯独り、中国革命の群像を語部として、叙事詩を残したことは、近代日中関係史上類例がない、まことに稀有なことである。たとえ花外の大正の叙事詩が詩として「技巧無視」、「垢抜けぬ」との批判があろうとも、中国を詠んだ不滅の成果であり、決して「時代錯誤」ではなかった。同時代の中国にも、この種の詩人もいない、詩もない。したがって孫文、黄興という中国近代を飾る指導者を同時代人として長編叙事詩に詠んだことそれ自体歴史的意義があり、中国に紹介するに値すると考える。

本文でも縷々述べたが、花外の詩を鑑賞するには、「自由」の一語が彼の明治大正時代の詩作の主題、キーワードであった。明治時代にあつては、近代日本における権力支配に対決しての「自由」という厳しい意味が基調と考えるが、大正時代の詩には、孫文の用例をあげたように、「自由」が頻出するものの、含意するところは、自由自在な「自由」、人間社会の

規約を離れて飛び回る英雄の自由、その賛歌のための措辞となった。一方黄興の叙事詩には「自由」に象徴するような理念、思想の次元にとらわれないで、史的事実とパーソナリティーが物語的に構成されている。その点孫文とは対照的であった。いっぽう、孫文、陳其美、黄興等の思想を、俠と義に託したアジア主義の視点を、叙事的あるいは物語的な文脈の中で展開しているのが、大正時期の花外の詩の特徴であった。

昭和時代に就いては、すでに枚数の予定を越えてしまい、校を改めたいが、昭和時期は詩のトーンが軽妙になって来ている。すなわち五七調、七五調をとり、行数も一定になり、いわば定型詩となっている。これは如何なる理由からか。昭和に入っては、花外が愛した孫文も黄興も陳其美も皆幽明を異とした。情熱を帯びて、共に悲憤慷慨する相手はすべて去ってしまった。ただ追憶の中に生きる彼らであった。したがって短絡的推論ではあるが、生々しい現場、同時代の緊張感からでなく、時間的空間的にも、対象との乖離のためか、過去の歴史的人物、事実として対象化し得る余裕が出来たのであろう。詩型、措辞、修辞も言うならば情緒的調子が詩脈を貫くようになる。例をあげると、

孫文

陳其美

黄興

紫金山なる孫文に

男のシャンよシャンハイの

若葉の頃は黄興の

紫匂う花あやめ

水を偲ばんお茶の水

面影うかぶ黄の字や

国父に捧ぐる誠かな

慄悍天下第一品

鶴見に立てる大石碑

南と北と結ぶべく

支那の江戸っ子陳其美よ

若葉青葉に埋もらせて

中華民國の俠の花

中華の華の革命史

自由恩人を慰めん

「英雄と詩人は永遠に侶伴なり」という緊張と情熱の詩心で接して孫文や黄興や陳其美を詠んだ大正期の息吹はなくなっている。ただ七五調のリズミカルな吟きが、霧の彼方から、アルコールの香を漂わせ、聞こえてくるのであった。

(参考)

児玉花外 本名伝八、一八七四年(明治七)七月七日、父精斎(萩藩の家臣であったが、身分上での恥辱をうけて争い、京都に出奔)、母絹枝の長男として京都で生まれた。同志社予備校、仙台の東華学校を経て、札幌農学校に転校、一八九四年(明治二七)、上京して、東京専門学校に学ぶが、どこも中退。一八九七年(明治三〇)、内村鑑三の「東京独立雑誌」に詩を発表し、一八九九(明治三二)処女詩集『風月萬象』。翌年『若草』、一九〇三年(明治三六)『社会主義詩集』(発売禁止)、翌年には『花外詩集』を上梓した。また多くの雑誌、新聞などに詩文を掲載した。彼の作詩数は、昭和女子大学の近代文学叢書で花外の詩文リストをみても、大変な数となる。その後、山口県で桑原伸一氏が発見されたもの(桑原伸一『児玉花外詩集 在山口未公刊詩資料』昭和五七年白藤書店)、また私が本論で引用した「日華学報」掲載のものを加えれば夥しい数となるに違いない。

結婚したが、間もなく、妻子と死別、酒を唯一の友とし、慰めとした酒仙的な日常と漂泊生活は、還暦頃には、すっかり健康を害し、正常な姿では過ごせなくなった。窮迫の度も深まり、一九三四年(昭和九)十一月、知人の援助で東大付属病院真鍋物療科に入院した。二人の施療部屋であったという。二年間の療養を過ぎた後、歩行の自由も失い、一九三六年(昭和一一)十一月救護法の適用で、板橋にあった東京市養育院分室の移った。養育院生活七年、一九四三年(昭和一八)九月二〇日、六九才で波乱の幕を閉じた。

(注)

(1)『社会主義詩集』は岡野他家夫が昭和一七年『書物から見た明治の文芸』(東洋堂)のなかで、伏せ字一杯で紹介した。敗戦後、岡野の努力によって、初めて公刊された(昭和二四年 日本評論社)。中野重治の「心からよろこぶ―序に代えて」と岡野の解題が良い。中野の温かいエピソードをそえているが、花外の晩年の評価についての言及はない。

岡野には『明治の文人』(雪華社 昭和三八年)があり、花外について一章を設けている。

小田切進編『明治社会主義文学集(二)』(明治文学全集 八三 筑摩書房 昭和四七年)にも「社会主義詩集」「児玉花外詩集」が収録されている。

- (2) 日夏耿之介『改定増補明治大正詩史 卷ノ中』(創元社 昭和二十六年)七八頁
- (3) 同 『明治浪漫文学史』(中央公論社 昭和二十六年)一一六頁
- (4) 河井醉茗『明治代表詩人』(第一書房 昭和二十二年)三二六頁
- (5) 『児玉花外詩集』(文松堂 昭和十八年)によせた河井の緒言
- (6) 島本久江『三木天遊と児玉花外』詩に生きる装備』(明治詩人伝)筑摩書房 昭和四二年 二八二頁
- (7) 花外の還暦祝賀会が昭和九年が催された。呼び掛け人が増井潤一郎という東京本郷の古着商であった。彼が同業者を集め、一九二六年二月大日本殉国会を結成した。昭和時期の花外の詩の支持者であった。(堀幸幸雄『右翼辞典』三嶺書房 一九九一年)
- (8) 井伏鱒二『児玉花外(上)協進の口述』(井伏鱒二選集)第四卷 新潮社 昭和六一年、初出『小説新潮』(昭和四〇年七月)
- (9) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第五二巻』(昭和五六年)二七頁
- (10) 島本『前掲書』二八九頁
- (11) 手塚英孝は花外から「私の詩は明治で終わっています」と聞いたという。(谷林博『児玉花外とその詩と人生』白藤書店 昭和五二年)
- (12) 飯沢文夫『明大校歌歌詞の成立』西条八十の自筆原稿を追って』(図書の譜)明治大学図書館紀要 創刊号 一九九七年三月  
同 『明大校歌歌詞の成立 補論』西条八十補作の裏付け資料』(前掲所二号一九九八年三月)
- (13) 大岡信『詩の日本語』(『日本語の世界』)中央公論社 昭和五五年 二三一〜二三七頁
- (14) 石丸晶子『叙事詩・劇詩とそのゆくえ』(国文学 解釈と鑑賞)一九八〇年一月
- (15) 川端康成『長編叙事詩』(川端康成全集 第一六卷文学時評)新潮社 昭和四八年
- (16) 野沢豊『孫文に捧げられた詩』(近きに在りて)第三六号 一九九九年六月 初出昭和五〇年六月『高校教育』
- (17) 上田信道『児玉花外の子童文学』(『国際児童文学館紀要』第一二号 一九九七年)『中学世界』(第二二卷一号、大正七年一月)
- (18) 後藤正人『児玉花外の詩』、百穂と芋銭「考」詩人と画家平福百穂・小川芋銭との交流』(和歌山大学教育学部紀要―人文学部)第四九集 一九九九年二月
- (19) 野口存弥『野口雨情―詩と人と時代』(未来社 一九九六年)所収の専論の「可憐なるものの死と孤児と―児玉花外と野口雨情」、関連論文あり。
- (20) 桑原伸一『児玉花外詩集』在山口未公刊詩資料』(白藤書店 昭和五七年)  
『児玉花外の新資料』山口県下における未公刊詩について』(『語文』昭和五三年三月)
- (21) 鈴木正節『博文館「太陽」の研究』(アジア経済研究所 一九七九年)  
辛亥革命および五・四運動時期の論策を通じて、日本人の中国認識を論じているが、残念ながら児玉花外については言及していない。同書には「太陽」の総目録も収録されて有効である。
- (22) 山口昌男『敗者の精神史』(岩波書店 一九九五年)二四九〜二五〇頁
- (23) 武田清子『日本リベラリズムの稜線』(岩波書店 一九八七年)一五〇頁
- (24) 上田前掲論文
- (25) 『中学世界』(第二八卷第一七号)
- (26) 大岡『前掲書』二二六〜二二七頁
- (27) 加藤周一『日本文学史序説 下』(筑摩書房 昭和五五年)三三三〜三三五頁
- (28) 吉武源五郎編著『児玉藤園將軍 全』(拓殖新聞社 大正七年八月)一二五頁  
児玉源太郎十三回忌に出版された。政財官軍文などの有力者が執筆している。
- (29) 『読売新聞』明治三十七年八月一四日、早稲田で作詩に研鑽した人物



- (30) 高杉晋作について「中学世界」(明治四四年九月)、雲井龍雄については「新小説」(明治四四年九月)に掲載されている。
- (31) 「雲と石の賦」(「日華学報」一六号 昭和五年二月)の一四連以下  
大養、頭山の両頭目  
孫中山の移靈祭  
羽織袴で列席し  
霊欣ばせたり孫文の  
腸匂ふ紫金山
- (32) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』(くろしお出版 一九六〇年)一二二頁
- (33) 千代田区編『千代田区女性史 全三巻』(二〇〇〇年)一巻
- (34) 武田『前掲書』一五七頁
- (35) 東京朝日新聞(大正五年五月二五日)に浙江省出身鄭企因、同年六月二日には台湾出身阿信の東京女子医専での記事あり。
- (36) 中村光夫『明治・大正・昭和』(岩波書店 一九九六年)九七〜一〇〇頁
- (37) 大岡信『大正詩序説』(『大岡信著作集 七巻』青土社 昭和五三年)二二頁
- (38) 乙骨明夫『現代詩人群像——民衆詩派とその周囲』(笠岡書院 平成三年)三七頁
- (39) 田中清光『大正詩展望』(筑摩書房 一九九六年)七七〜七八頁
- (40) 中野重治と安東次男は、大正の叙事詩は「どうにもならん」と否定的な発言をしている。(『座談会 明治・大正文学史(6)』岩波書店 二〇〇〇年)七三〜七四頁
- (41) 江戸時期には講談、浄瑠璃の世界で人口に膾炙された。明治に入って、河竹黙阿彌作として森田座で初世市川左団次の当たり狂言であったという。大正時代には菊地寛「丸橋忠弥(全三幕)」、日本戯曲全集、第四六巻、現代篇第一四輯「春陽堂 昭和三年」
- (42) 日夏『前掲書』(注2) 八二頁